

---

# そんな二人は運命共同体

池魚籠鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そんな二人は運命共同体

### 【NNコード】

N5966D

### 【作者名】

池魚籠鳥

### 【あらすじ】

俺は生まれつき不運だった。彼女は生まれつき幸運だった。そして二人は互いに運を共有し合う。気付けば運命さえも…。二人は一体どうなるか。上手に出る彼女と下手に出る俺。そんな二人の結末は…?

## 第一話「幸運と不運と相殺し」（前書き）

何とか完結まで頑張ります。よろしくお願ひします。

## 第一話「幸運と不運と極致化」

「ここはいつにならしだからね?」

「お、おうー!」

「最初はグー……」

「じやんかん……」

「ポンー!」

俺は運が悪い方だと思う。運が悪いと言つても命に関わるような不運は全く、いや…たまにしかない。俺の日常には小さな不運が潜在的に潜んでいる。それに怯えながら日々平凡を願い細々と暮らすのが、俺こと風呂 ふつろ 恭だ。あまり俺の名前には突っ込まないでもらいたい。

「うひ、寒い。」

最近めつきりと冷え込む季節となつた。早く寝なくとも寒さで自然と早めに起きてしまう。特に布団の肩口から入り込む冷気が嫌いだ。これが好きな人がいるならば余程の風変わりだと言えるだろう。

「うえ、雪が降つてゐるよ。」

窓を覗くとまだ薄暗い中にちらちらと白銀の結晶が舞つてゐる。ここいらは雪が積もりはしないものの、毎年のように雪が降る。雪が大量に降つてほしいとは思わないが、ないと寂しいものがある。だから俺はこのままでいいと思う。

「それでも寒い。もう少し寝ようか。」

布団を被り直して一度寝の態勢になつた。名前は忘れたが偉人の残した言葉にこんな言葉がある。

『朝寝ほど高い出費はない』

朝寝、つまり早起きしなさいという教えなのだろうが、俺に言わせれば朝の一度寝ほど堪らないものはない。一度寝万歳だ。もしこの偉人と論争になつたら論破してやる自信がある。それほどまでに素晴らしい時間が約束されるのだ。

「あそのまま寝しなさい。そうすれば天国とこづ名の永遠の安らぎが訪れるわ。」

「ふう、やはり早起きは三文の得と書つしな……起きよつ。」

「わつ。」

棒読みに近い言葉を吐いた俺は命の危険を感じながらも起きることに成功した。もし口を閉じていたら、本当に一度と一度寝ができないくなっていた。背中には冷りと嫌な汗が吹き出ている。

「お、おはよつ悠璃。良い舌打ちだね。」

「わつ。」

この妖怪舌打ち女は俺のよく知る人物だ。

「悠璃？」

「ひーーーお、おはよつ『やれこませ』悠璃様。」

東條悠璃。この俺にとつて半ば運命共同体のような存在だ。有り体にいえば妖怪舌打ち女だ……もとい幼馴染みだ。

「遅いわ。」

「すみません。」

これは平謝りなどではない。心の底から謝っている。俺は悠璃には頭が上がらない。別に悠璃に媚びているのではない。

「お腹すいたわ。」

「今出来るから。」

朝食にしては少し早い時間だけど、俺は悠璃の分も含めた朝食をせつせと捨てる。全然苦ではない。

「はい、どうぞ。」

「頂きます。」

極一般の献立の朝食を悠璃はほほばる。それを確認して俺も手をつける始める。ふと悠璃は箸を止めた。

「ぐう…。」

「何? 何か文句があるわけ?」

「め、滅相もござりません。」

今日の朝食の採点である。辛口過激のでは…とは言えなに俺だつた。ちなみに昨日は45点だ。

「こつになつたら恭は私に満足のいく物をだしてくれるのかじりへ」

「そ、それは。」

「それに朝ぐらい私が作つて…。」

「それだけはダメだ。」

「やつ。なら…早く私を満足させなさい。」

悠璃の目が鋭くなつた。背筋がきりつと伸びる。

「はひ。」

それから悠璃は残りを黙々と食べ始めた。俺が頑なに悠璃の提案を拒んだ理由は俺にとつてとても大事なことだ。悠璃の料理の腕前は俺などより格段に上だ。それでも俺が作るのは、俺の中の意地というかプライドだ。とにかく結局の理由はまた改めて話そつ。

「早く行くわよ。」

時刻は7時半を回ったところで、俺達の通う高校までは歩いて20分も掛からない。制服に身を包んだ俺達は学校までの道のりを並んで歩く。

「寒いな。」

「そうね。風邪引いても看病なんてしてあげないから。」

「あはは…本当に見に染みる程寒いな。」

しばらく歩くと左右に開いた分かれ道に差し掛かつた。いつもは右に曲がって通学している。一応どちらからも学校には行ける。いつも通り右に歩いて行くと悠璃が立ち止まつた。

「今日は左へ行くわよ。」

「わかった。」

突然の進路変更だった。が俺は素直に従う。

無事に学校に着いた俺達は教室へと向かつた。2年3組と書かれた教室に入るとなちらほらとクラスメートの姿がある。悠璃も同じクラスメートだ。

「おーはーよー！」

そこに無駄に元気で間延びした声の挨拶が聞こえて来た。

「おはよ。」

「うい。」

俺と悠璃は適当に流した。流された本人は少しいじけている。

「冷たいね……君ら。外も寒いけどさあ。」

あまり紹介したくはないが基本的に友達の和矢わやかずき一樹だ。基本的になのでたまに友達でなくなるが気にしないで貰いたい。

「それよりさ、今朝の事故知ってる？」

「事故？さあ知らないな。」

「おー一人さんが毎日通つてる道で起きたらしいよ。確か三丁目の辺りで電柱にスリップした車が突つ込んだとかって聞いた。丁度ついつきだつてさ。とばっちり食わなくて良かつたな。ははは！」

一樹はそつと自分の席にカバンを置きに行つた。俺は少し動搖していた。何故ならあの道の途中にあるコンビニで消しゴムを買おうと考えていたからだ。悠璃がああでも言わなければ何かしら事故の影響を受けていた。もし悠璃にああ言わなければひょっとするとひょっとしたかもしない。

「悠璃。」

「気にしないことね。」

「ああ。」

「大丈夫よ、恭は私の言つ通りにすれば上手く行くわ。」

悠璃は優しく笑つた。俺はいつもこの微笑みに助けられている。

「恭が突発的に思つたことと私が突発的に思つたことはいつも逆なんだから、それさえ常に互いに共有し合えば最高の人生になるわ。」

俺はすぐぶる運が悪い。不運な男。

彼女はすぐぶる運が良い。幸運な女。

……そして、二人は 運命共同体。

## 第一話「幸運と不運と相殺と」（後書き）

もしよろしければまた読んで下せ。」指摘」評価お待ちしております。

第2話「噛み付けない犬と噛み付ける主人」（前書き）

遅れました。まあ読んで下さい。

## 第2話「噛み付けない犬と噛み付ける主人」

俺は次の授業の為に机から教科書を出そうと、手を中心に入れて探し  
ている。次は日本史だつた。

「日本史だからこれだな。」

俺は机の右側にある教科書を出そうとした。日本史の  
教科書は大きめなので間違いない。

「左の方よ。」

「え？」

隣の席から然り氣無く悠璃は言つたがもう手にした教科書は机の上  
へと現れていた。

「さすがに間違わ……。」

俺は絶句してしまつた。

「…保健体育。さすが歩く性教育ね。」

「ち、違うーいや少し当たつているけど。つてそういうじやなくてだな。」

「

急いでもう一度探すと机の左側の方に入っていた。相変わらず俺は運が悪いらしい。それを嘆いても仕方がないが少しごらりと嘆いても罰は当たらないはずだ。

「ふう。」

我ながら深い溜め息をついてしまったなと思うが、別に良いだろ。

「あらどうしたの？ そんな溜め息ついて。アンタに溜め息つくほど嘆くことなんてあるわけ？」

厳しい悠璃の言動に俺のガラスの心が傷付いた。その報復に出ようとして俺は皮肉を言つてみる。

「どうな隣人とか。」

「あらそり、ふふふ… 誰のことを言つているか知らないけどドMな変態のアンタには一度いいじゃない。」

「ま、負けるかこのくそ！」

「ほう、飼い犬が主人に噛み付くの？ ほれこれをやらないわよ、ん？」

「そ、それは！？」

俺は迷っていた。人間としての誇りと威儀を守るか、犬になるかで。答えはもう決まっている。

「わあ、わあ ん！」

「よしよしいう子ね。」

悠璃が手にしていたのは俺の大好物のビーフジャーキーであった。悠璃の手に頬擦りをすると悠璃は俺の頭を撫でる。

「ほら、」褒美よ。」

「わん！」

獲物にかぶり付く俺は本当に犬さながらであった。それは仕方がないことだ。俺の場合子供の無邪気さと女の涙、それからビーフジャーキーにだけは敵わない。

「アホ犬。」

「わん？」

日本史の授業が始まると、俺の気持ちは憂鬱だった。抜き打ちで小テストが実施されるからだ。

「ノーマークだ…。」

「最初から分かっていたら抜き打ちじゃないでしょ？バカね。」

隣の毒舌女王は涼しい顔で俺を罵倒する。それもそのはずだ。悠璃は頭が良い。学年で一番というほどではないものの、成績は常に上位に落ち着いている。一方の俺は普通。勉強はしないことはないが、してもテスト前などである。俺はそれでいいと思つ。

「ま、でも四択式だから分からぬ問題でも勘で書けば当たるかもしないな。」

テスト用紙が配られ俺は啞然とした。問題数は全10問と少ないが内容がかなり難しい。というか「ア過ぎる。周りからも難解な顔をして唸つてゐる者が多かつた。数分間考えてはみたが答えが出るはずもなく、制限時間の15分が過ぎようとしていた。ここで俺は賭けに出た。

「全部“ア”だ。」

下手に適当な答えをバラバラに書いて全問はずれるよりはどれか同じ記号を書いた方が正解するかもしれない。

「ムフフフ…。」

我ながら良い「アイデアだと思い、自然と爽やかな笑みが漏れた。

「気持ち悪いわ。」

「悠璃ビリした具合でも悪いのか？」

俺は心配になり悠璃の顔色を伺つた。顔色はそんなにも悪くないようで元気そうだ。一応悠璃の額に手を当てて熱がないか確認したが

熱もないよつだ。むしろ冷やりとして気持ちがいい。心なしか悠璃の顔が赤っぽくなつた気がする。

「あ……アンタ本当にバカだわ。」

「ん?」

「私は恭が気持ち悪いと言つたのよ。」

「…そりうなのか。」

いつもそりう言われていても面と向かつて言わると辛いものがある。ここは悠璃を懲らしめるために演技をしようと思つ。

「恭?」

「…………。」

「わ、悪かったわ。いくら本当のこととはいえ、ストレートに言つ過ぎたわ。もつと遠回しな言い方で…。」

「あーもつ、ストップ、ストップ。もついいから謝らないでくれ。」

「あらそり、わかった。」

「ぐうう。」

この娘はなんという奴だ。真剣に謝つているのに天然で毒舌が交じつてくる。才能といえば才能だが、なんと嫌味な才能だらうか。などと思つてみると制限時間の15分が経過した。

「難しい問題だつたわね。ほとんどわからなかつたわ。恭は……聞くだけ無駄ね。」

「つひせ」は聞けよ。例え無駄でも。」

「へえす」こわよ。無駄ではなよつね。自分でわかつてゐだけ進歩したじやない。」

「そ、そつか？まあ俺も日々成長しているからな。」

どこのかしゃくにさわるが俺は褒められたみたいだ。ちょっと嬉しい。

「はあ……恭が羨ましいわ。ま、恭らじいけどね。」

授業終了のチャイムが鳴つた。

「今日の授業はここまで。小テストは次の授業に返すな。ちなみに答えは全部“イ”だ。難しかつただろ？ハハハハハハ！」

歴史の田辺はそう言つと颯爽と帰つて行つた。同時にクラスは落胆している。その中で一際落胆しているのは俺だ。我ながら良い作戦だと思つたが撃沈だつた。

「ぐはつ。」

「普通に解けば一問べりこ当たつてたんじやないの？」

「あ、あいひこひ田もあんじ。あいひこひくはんじなんだよ？」

「私は全部“イ”って書いてたけど。まあ恭が“ア”って書いたから  
それはないとと思つたし、何となく“イ”と思つたしね。サンキュー  
ーわんちやん。」

勝ち誇つた顔をしてくる悠璃にさすがの俺も腹が立つた。

「謀つたなー。」

「まあまあやつ怒りなーの。またまた」褒美あげるからね？」

悠璃に詰め寄つた俺ではあつたが、悠璃の右手に輝くそれを見たら  
俺の怒りと理性は吹つ飛んでしまつた。

「わおー！」

「ある意味幸せな奴ね。…………可愛い。」

### 第3話「小春日和」（前書き）

キャラをやるそり増やせつかと思こます。

### 第3話「小春日和」

今日は日曜日だ。その響きだけで幸せな気分になれる素晴らしい日だ。『ういう休みの日は家でじっとしているのが一番だと思う。俺にとって、外に出るという行為そのものに危険分子が潜んでいるため、おちおち出かけるのも嫌なのだ。

「窓の鍵よし、部屋の鍵よし。」これで今日は…。

「私と二人つきりね。」

「そうそう悠璃と二人つきり……ってそういうじゃない…というかいつの間に?」

「昨日の夜からよ。」

「マジっすか?」

「マジっすよ。」

気付かなかつた。いや気付けなかつた。確か昨日の夜は寝る前にドアと窓の鍵が掛かっているか確認したはずだ。それに念には念で部屋の中も全て確認していたのに。恐るべし我が麗しの隣人だ。

「で、何しに来たんだ?」

俺は率直な疑問を悠璃にぶつけた。

「何がないと来ちゃ いけないの？」

質問を質問で返すというなかなかの作戦で応戦していくといひなたすが我が永遠の好敵手だ。

「い、いやあこんな休みの日に俺なんかと過ごすのはつまんないだろうなと思いまして。」

「ふーん、そうね。」

「でしょでしょ。」

俺は急いでドアの鍵を外してドアを開けた。

「何してるわけ？」

「俺といひこなつまらないですからね。」

「つまつこひを出るところがもしかしたことね。」

悠璃の目がきらりと光った。というか恐い。俺は逆鱗に触れたかなと思ったがここまで言つたら頷くしかなかつた。

「そ、そ、そういうことかもしません。」

俺は覚悟を決めて歯を食こしづめた。

「なーんだ… それなりにいつと並べばいいの。わかったわ。」

「えつ？」

一瞬耳を疑つた。田から鱗とはまさこことだ。俺の命をかけた覚悟は無駄に終わつた。だがそんなことより悠璃の方が心配だ。世界が終わる前触れだとでも言つのだろつか。悠璃が素直に俺の言つことを聞くとはどうしても解せない。

「なら、行くわよ。」

悠璃はおもむろに俺の腕を掴んだ。

「はい？」

今俺は恐らしくかなり間抜けな顔をしているだろ。しかし今の俺にとつてそんなことは重要ではなかつた。

「行くつて家に帰るんじゃないのか？」

「違うわよ。外に出掛けるんだよ…さつきにじつまらないつて言つたじやん。」

そらに悠璃の腕を引く力が強くなつた。華奢な体のじいからじいのよくな力が湧いてくるのだろうか。

「いや、あれはだなそういう意味じや…。」

「はあ？」

「な、何でもありますん！」

鬼だ。俺の目の前には鬼がいる。この鬼にこれ以上アドレナリンを出されるのは大変危険なことだ。今日のところは大人しく従おう。かくして俺の平穏な日曜日はざつとなつてしまつたのだろうか。

「次はあっちね。」

「へーい。」

俺達は市街地のデパートまで来ている。割りと広くてある程度の物は揃っているので一日見て回つても飽きない。だがそれは買い物が好き人の考え方であつて、俺のような者にとつては当てはまらない。それでも何故悠璃にこうして付き合つてやつてているかというと……。悠璃が恐い、からではない。その理由は気付いてしまつたからだ。

「楽しそうな顔しやがつて。」

誰に言つのでもなく呟いた。悠璃は楽しそうな顔であちこちを見て回つてゐる。あんな悠璃の顔を見たらたまにはいつして休みにでも、悠璃とふらふら出歩くのもいいかなと思つた。

「ふがらほお。」

「何それ？」

「悠璃は呆れでいる。現在買い物も終わり、一人でお茶をしている。悠璃はロイヤルミルクティーで俺はエスプレッソを注文した。

「説明するほどのものじやないけど、強いて言えば今日一日の疲労とかストレスを口から出す時に唱える呪文みたいなものだ。その日の困憊度によつて数百種類の組み合わせがあるぞ。ちなみにさつきのは…。」

「へぎつたいからもういい。てかそもそも疲労とかストレスを口から出せるの？」

「出せる。出せるのだよ悠璃君。人間とは一見不便にできているみたいだろ？が、実は万能なのだよ。それを引き出すまでが大変なんだがね、深層心理のそのまた奥にアクセスさえしてしまえば造作もないことはないね。ハハハ…」めんなさい。」

「もう喋るな。」

少し俺は調子に乗ってしまったようで、眠れる獅子を起しけてしまった。少しだけ冷めたエスプレッソを一口飲んだ。嫌味じやない苦味が口一杯に広がる。閑静な午後の昼下がりをこいつして過げるもの悪くないなと思う俺だった。通りを歩く群衆の賑やかささえもどこか趣きがある。寒空の下、一層に澄んだ蒼穹が眩しかった。

「な、何か喋りなよ。」

「…………。」

「無視するなあー。」

突然の悠璃の怒声。俺はすっと窓越しに空を眺めていたようで悠璃の話を聞いていなかつたみたいだ。

「悪い悪い、ちょっとぼーっとしてた。」

「そんなんに…。」

「ん?」

「そんなんに私といふとつまらない?」

悠璃の真剣な眼差しに俺は息を飲んでしまった。実直なまでの吸い込まれそうな色素の薄い目に本当にのまれそうだ。不覚にも美しいとやう思った。

「楽しそう。だからまた来ようつた。」

「…………。」

「ゆ、悠璃さん？」

今度は悠璃が黙ってしまった。俯いて何やら呟いていたが小さ過ぎて聞き取れない。

「きよ、恭がそこまで言つたら仕方ないわね。私が暇な時にもまた誘つてあげるから。」

「頼むよ。」

それからじばらべ談笑を続けて久々の一人の日曜日を存分に満喫した。

そんな小春日和な一日だった。

### 第3話「小春日和」（後書き）

最近寒いです。なので皆さん風邪をひかないようお手洗いを付けて下さい。

## 第4話「弁当を食べよう」

「おはよ。」

「うー。」

俺と悠璃は各自の友達に挨拶をしながら教室の中へと入っていく。自分の席に着いて一息ついていると俺のよく知る人物が近付いてきた。

「一樹、うい。」

「おはよ、和矢君。」

「グッモーニング！」

今朝の一樹の挨拶は英語であった。普通に挨拶をすればいいもののいつも捻つてくる。

「悠璃ちゃん今日も美人さんだね。恭は普通だけビ。」

「あ、ありがとう。和矢君も毎日元気だね。」

それだけ言つと一樹は颯爽と自分の席へ行つてしまつた。

「「」こつは元氣だけが取り柄みたいな奴だからな。」

「その元氣を恭にも見習つてほしいものね。」

悠璃の口調が元に戻つた。俺以外の男子にはいつもより柔らかい口調で話すくせに、俺と話す時はいつも上から目線なのだ。突つ込んで直す氣がないと思つので俺はスルーしている。

「おはよコウ。」

「あ、沙那おはよ。」

会田沙那この娘は悠璃の親友だと思つ。だと思つと言つたのは人様の親友を俺が決めるようなことはしないからだ。だがそれを差し引いても一人は仲が良いと思つ。

「うい、ナサ。」

「…おはよ不運凶。」

「おこナサ、漢字が違つだ。」

「意味が分からぬ。そつちけひ名前間違つてゐるから。」

俺と沙那はいつもこんな感じだ。仲が悪いわけではないし、よく会話もする。

「「」こちのはあだ名だからいいだろ?」

「なら私のだつてあだ名にあります。」

「…それだけはやめてくれ。」

「じゃあそつちもちやんと名前で呼んで。」

「うい。」

俺に付けられそうなあだ名の方が若干酷いような気がしたがその対等な条件を飲んだ。

「沙那そんなバカと話なんかしたらダメよ。」

「羨ましい?」

「な、な、何で私が!?」

「可愛いコウ。」

悠璃と沙那は何やら話しているが上手く聞き取れない。少し気になつた俺は一人に訪ねてみた。

「何の話をしてるんだ?」

「何でもない!バカ恭。」

「恭が気にすることじやない。」

「…すんげえ疎外感。」

俺だけ除け者みたいでかなり寂しかった。

時より差す冬の日射しは何とも堪え難いものがある。それに増して教室に効いた暖房の相乗効果で眠くなる。意識が落ちていく。

夢を見た。

「ねえ父さん、母さんはどうしたの？」

「母さんはなむけつとだけ遠い場所に先にいってしまったんだよ。」

「それじゃあ直ぐにそこに行けば会えるの？」

「これは幼き故の無知。

「そこに行けば会える。でもな母さんはまだ来ると言つたんだ。」

もつとじつにこなれてな。」「

意味も知らずにただ田の前の欲望に忠実だった俺の無粋な勘違い。

「どうして…？父さんは会いたくないの？母さんとのじつに行きたくないの？」

純粹過激な供の何氣ない言葉は最愛なる父を傷付ける凶器。

「会いたくない、と言つたら嘘になるな…でもな俺達はまだいけない。アイツが命を掛けて残したものもつと噛み締めるんだ。それに焦らなくてもその時が来れば…きっと」。

父親の威厳。

「あつと、逝けるや。」

その偉大さにその時はまだ気付けなかった。

あまり見たくない夢だった。それと同時にかなり見たくない現実が田の前にあつた。

「…ん。」

「もう昼休みに入つてるんだけど。」

その田で俺を見ないでくれと言ったらどんなに幸せなのだろう。時計を覗くと毎休みを5分過ぎたところだった。

「おお！飯だな飯。何だ悠璃まだ食つてなかつたのか。んじや一緒に食つか？」

今日は開き直つてみる作戦にしてみた。

「死にたいの？」

「す、すす、すみません！俺の為に待つて頂いた挙句、このような暴言を吐いてしまい釈明の余地もありません。」

深々と頭を下げたが一向に何も語りない悠璃。最後の手段で土下座をしようと始めた時だった。

「早く食べるわよ。」

悠璃はそう言つと黙々と自分の机と俺の机を合わせてカバンから弁当を一つ取り出した。有り難いことに俺は毎日悠璃の作る弁当を貰つている。

「お、おい。」

「は、はい。」

「いいから、時間なくなるからさつと食べろ。」

きょとんとした俺を余所に悠璃は既に席に着き俺を待つていた。

いつもなら、完全に怒っていたはずなのに、悠璃は何も言わなかつた。

「今日もつまこよ。」

「アリ。」

「……。」

会話が上手く続かなかつた。悠璃は黙つて食べている。俺が作る朝食なんかより、断然にうまい悠璃の弁当を、俺は毎日食べては幸せな気分にしている。だが今日は、悠璃の様子が違つていて、そつちが気になり、正直あまり味が分からぬ。しばらく沈黙は続いたが、おもむろに悠璃は箸を置いた。

「また見たの？」

「え？」

一瞬、何のことだかさっぱりわからなかつたのだが、直ぐに何のことだか理解した。

「また夢を見たんでしょう？」

「……ああ。最近見てなかつたんだけどな。」

「恭の様子がいつも違つたから。」

「ちうか？」

「私が違ったのは悠璃だけではなかった。

「私にはわかるから、他の誰にもわからなくても私だけはわかるよ。

「

「悠璃だっていつもと違つたぞ。」

少し誤魔化し氣味に言つてみる。

「それは恭のせいよ。だから今度からはそういう顔するな。もししそうな時は私が話を聞くから。何分でも何時間でも聞くから、…そういう顔しちゃダメ。」

泣きそうな顔をしながら言葉を紡ぐ悠璃を見て心が柔らかくなつた。

「うー。」

今日もまた救われた。

「悠璃も泣くなよ。」

「な、泣いてないわよ。」

悠璃はまた箸を取つて残りの弁当を食べ始めた。それを見た俺も弁当を食べた。今日の弁当はいつもよつよつめいよつな気がしてならなかつた。



## 第4話「弁当を食べよう」（後書き）

今回はシリアルアスでした。たまにはいいんじゃないでしょうか。ではまた。

「恭、先に帰つていでいいから。」

時刻は放課後へとなつていた。大抵は一緒に登下校を共にしているそんな悠璃からの一言は珍しかつた。

「どうかしたのか？」

「評議委員会があるの。だから遅くなるから先に帰つていでいいわ。」

そういうえば悠璃はこのクラスの学級委員長だった氣がする。そして、その評議委員会は長丁場になることで有名だつた。

「別に待つてもいいぞ。」

俺は特に帰つても用事がないので、のんびり図書室でも待つていいうかと思いそう言つた。

「え、いいの？それじゃ待つて…。」

悠璃がちょっと嬉しそうな顔で何かを言おうとしていた。がその時悠璃の携帯電話が振るえた。

「もしもし、え…、つん…でも…あり…わ、わかつた言ひておべ。や  
れじやあね。」

通話が終りして携帯電話を制服のポケットにしまつて手をくまねて溜め息  
をついた。

「電話誰から?」

「…お母さん。」

「悠也んがなにでまた?」

東條悠也ん。悠璃のお母さんである。悠也んはとにかく話にな  
つていてる。毎日晩<sup>ばん</sup>はんをいじり酔走になつてゐし、俺の保護者にも  
なつてくれてゐる。

「恭に買ひ物付き合ひてましこつて。荷物持ちが必要だけど私帰り  
遅いから恭に手伝つてもういたいみたいよ。だからお母さんに付き  
合つてあげて。」

「やうこいつ」とか。わかつたやうにするよ。んじや先帰るな。

「わ。私も終わつたら直ぐ帰るから。」

何故か少しむつとした悠璃を後にし帰路へと着いた。

「ハヤシ。」

悠璃の家のインターホンを鳴らした。

「はあい。あ、恭ちゃんね。」

俺の声を確認するヒエプロンを着けた悠ちゃんが玄関へ出迎えてくれた。色素の薄い田は悠璃といえつゝで全体も似ている。綺麗な女性だ。

「あ、あの…。」

「どうかしたの?」

「放して下せ。」

悠さんにはいつも当たっていていつも少し困る」とがある。それはいつも抱きつかれることだ。嫌ではない。嫌ではないけれど世間的に痛い。女性特有の柔らかさは心地が良くてついついそのまままでいたくなる。しかしそこは分別をつけなくてはならないので我慢しなくてはいけないのだ。

「別にいいじゃない。今日は悠璃がいないんだから。」

「や、やつひ問題じゃありません。」

「むへ…ヤだ。」

どつちが子供だか分からなくなる。

「あ、そうだ。悠さん早く買い物に行きましょ。」

半ば強引に悠さんを離して買い物へと促した。渋々悠さんは了解し、家の中に戻つて支度をして出てきた。

「恭ちゃんと一緒に買い物なんて久しぶりね。だから私はおめかしするのがんばったのよ。」

「いや、がんばらないで下せ。デートじゃないですから。」

「似たようなものじゃないの。」

悠さんはやうやく俺の腕をとつて腕を組んだ。明るくて笑顔の素敵な悠さんを見ていると、俺の心は洗われる。例え昨日気に食わないことがあるつと、例え昨日誰かと喧嘩しても、例え今日嫌な夢を見たとしても、悠さんと話せば俺は軽くなる。もし俺がこの世でもう一人だけ母親と呼べるなら、俺はこの人を母さんと呼びたい。

「これで全部揃つたわ。恭ちゃんが手伝つてくれたおかげで助かってやつた。」

「これぐらいお安い御用です。」いつこいつ時こそ俺みたいな男手を借りて下やこね。」

両手に買い物袋をぶら下げているが然程重くはない。けれど、女人にとっては意外と堪えるものだろう。いつもは悠璃と半分ずつ持つているのかも知れない。こんな華奢な腕をしているのにいつも力強く感じるのは内面的なものなのだろう。

「恭ちゃん…。」

ふと悠ちゃんを見てみると皿を潤ませて何故か上気だつている。妖艶だ。

「どうしてたんですか？」

「二つの間に女を口説けるよつになつたの？ああ恭ちゃんが私をそんなにも想つていてくれたなんて嬉しいわ。」

「ぐ、口説く…？ええ…？」

俺はただただ困惑した。俺は生まれてこの方女を口説くことはもちろん告白だつてしたことがない。まして悠璃の母親を口説くなんてもつての他である。

「私はまだオンナよ。恭ちゃんたえよければ…。」

「よくあつません。」

「意地惡。」

「意地悪で結構です。」

「モーニング」と書かれて今日のおかずのハンバーグあげないんだから。

1

その一言で俺の中の何かが崩れ落ちた。

目からは熱いものが零れ出た。すると俺の頭の上に柔かくて温かいものが置かれた。それは悠さんの手のひらだった。

「よしよし、いい子は泣かないの。ママもひとつ意地悪だつたね。ちあんとママの特製ハンバーグをあげるからね、よしよし。」

「…ひつぐ…ホント?」

「…ひとつだけお願ひ聞いてくれたいいわよ。」

# 「お願いって何?」

悠さんの手が俺の頭をふわりと撫でる。

「それはね……『ママ、大好き』って言つてほしいの。できる?」

「うーん、でもね。」

ハンバーグ。

「ママ、大す……。」

「何を言わされてんだあ……。」

「へぐつー?」

両音速に達した何かが俺を直撃した。一瞬意識が飛んでしまった。

「ゆ、悠璃。……ハツ!?俺は一体何をしようとしてたんだ。」

ぶつ飛んで来たのは悠璃のカバンだった。眉を吊つ上げ立ちしてこっちを睨んでいる。恐い。

「向ひのお母さんの口車に乗せられてんのよ。見覚えのある後ろ姿だと思ったら案の定恭とお母さんじゃない。だいたいお母さんも何してんのよ!」

実の母親に向かってその睨みは中々できなー。一朝一夕の技ではない。

「恭ちゃん恐いよ。」

俺の後ろに立てる悠さんだが、口でああ言つてこむ鬱ひは恐そうに見えなかつた。このままでは埒が明かないでの帰る」とさる。

「と、とつあえず帰りませんか?」

「ふん、わうね。」

「うん、恭ちゃんの大好きなハンバーグ作らないとね。」

俺達は横一線に並んで西口で真っ赤になつた道を足並み揃えて帰つて行く。

背中に背負つた影は細く長くまるで、今まで歩んで来た道をなぞるよつこ、そして追い掛けているよつこ俺には見えた。

## 第5話「隣人の母」（後書き）

お腹が痛い今日この頃です。再び注意しますが風邪にはお気をつけを。

春が待ち遠しいこの頃、穏やかな日々は続いていた。心なしか暖かさがすぐそこまで近付いている気がする。俺と悠璃は通い慣れた道を歩いている。

「ほへえ。」

「シャキッと歩かないと遅我するわよ。」

「んなこと……ぐぐうー?」

阿呆ね

俺は何の罪もない電柱を睨み付けた。

先輩！

鼻を擦りながら歩いていると後ろから聞き覚えのある声が飛んで来た。

「おはよう彩萌。」

「悠璃先輩おはよーついざこます。」

白瀬彩萌。<sup>しらせあやめ</sup>俺達の一つ後輩になる。正直なところ俺にとつて後輩になるのかは疑わしい。悠璃と白瀬は仲が良い姉妹のように見える。自然と絵になる一人は学校でも一目置かれる存在だ。ただ始めて言った通り俺との関係は皆無である。もつと碎けて言えば仲が悪いのだとも言える。

「うー白瀬。」

とは言え挨拶は毎日やる。俺自体は白瀬に對して何も嫌悪など抱いていないし、普通に接している。会話は全くないけれど。

「悠璃先輩、今日も綺麗です。」

「うふふ、彩萌こそ今日も可愛いわよ。」

悠璃の腕に抱きついて寄り添う白瀬は「機嫌であった。本当に絵になると俺でも思つ。

「二人共突つ立つてないで早く学校に行くぞ。」

「そうね、行きましょう彩萌。」

「はー先輩。」

それなりの余裕を持つて学校に登校した。玄関で履き馴れたスニー

カーを下駄箱にしまひ。

「あ、やうこえれば職員室に回らないといけないんだったな。んじゃ行つてくるよお一人わん。」

「ねえ彩萌。」

「何ですか先輩？」

私は常々思つていた疑問をぶつけることにした。

「率直に聞くけど恭のこと嫌い？」

「…え？」

彩萌の眉が微かにではあるがぴくりと動いたのが分かつた。彩萌はあまり感情を積極的に前に出すような人ではない。それでもよつやく最近になつて何となく読み取れるようになつたと思う。

「どうなんですかね。たぶん普通です。」

「普通…ね。その割には全然話さないじゃない。」

「男の人があまり得意じやないんです。」

「そ、そ、『めんなさい、いきなり変な話をして。』

「大丈夫です。それじゃ先輩私をこれで。」

今の彩萌は何かを堪えているように見える。だから私は一つ布石を置いてこの話を終わりにした。

「あ、もう一つ。私の事は好き?」

「ふふ、ええ大好きです。」

彩萌は自分の教室へと向かつた。

私は今の彩萌の言動によつて、私が抱いていた疑問が確信へと変わつていつた。

「心中複雑ね。」

俺は、ぶらりと学校の校門へと向かつてゐた。時刻はもう放課後で、俺は帰路に着こうとしていた。悠璃は今日も評議委員会があるので先に帰ることにした。校門に差し掛かろうとした時、前方に見覚えのある姿を見つけた。

「よつ白瀬。」

白瀬は俺の声に気付いたようすで一歩引いて振り向いた。

「…………。」「

言葉はいつものように無かつたが、俺の見間違いでなかつたら軽く会釈をしたように見えた。

「今帰り……だよな。」「

「…………。」「

「いやひ、悠璃のやつ評議委員会で遅くなるからって先帰れって言われてわ……ははは。」

「…………。」「

やはり会話に成り立たないと苦しい。半ば俺の独り言にも聞こえ、端から見れば痛い人だ。だが今日はめげない。諦めたら何も変わりはしない。

「な、なあ白瀬。」「

「…………。」「

「一緒に帰らないか?」「

「…………。」「

白瀬は歩みを止めて啞然としている。やはり今日は無理かなと思い俺は大人しく一人で帰ろうと白瀬に挨拶をしようとした。

「俺なんかと帰るの嫌だよな。んじゃ先行くな。また明日。」

もちろん返事はなかつたがこれ以上俺が側にいても何にもならない  
だらうと思い立ち去るひつとした。

「ん?」

と思ったのだが何かが俺の制服の袖を引っ張っているのに気が付いた。俺は不思議に思い頭だけ後ろを向いた。

「じり…せ?」

何と白瀬が俺の袖を掴んでいたのだ。意表を突かれた。白瀬は軽く俯いてはつきりとはその表情は伺えない。それから俺達は黙つたままだつた。それが何秒続いたのか何分続いたのかは分からぬ。

「び、びひしたんだ白瀬?」

やつと口から言葉が出た。その言葉だけで精一杯だった。

「…そ…その…い、一緒に…帰つても…い、い…いいです。」

言葉に詰まりながらも白瀬は俺の言葉に返事をした。それはとても儂げで、細く、美しい小さな声であつた。それでも俺にははつきりと聞こえた。だから俺はその声に聞き入れそうになりながらも、白瀬が不安がらないよう直ぐに返した。

「うん、そつか。なら一緒に帰ろう。」

「……。」

白瀬は言葉はないものの軽く頷いていた。一人並んで歩くなどということはそもそもしない。というか無理だ。俺と白瀬は微妙な距離で歩いた。俺の方が一步半前に出る形だ。横目で白瀬を見ると白瀬も気になるのか俺と目が数回あつた。その度に目を逸らした。俺らは付き合い始めの中学生のカップルかと思つたのは内緒だ。

「ほへえ。」

「シャキッと歩かないと座我するわよ。」

「んな」と……ぐぐつーー?」

「一日も続けてなんて阿呆ね。」

俺は昨日に続き何の罪もない電柱を睨み付けた。しばらく歩くと足音と聞き慣れた声が飛んで来た。

「先輩。」

白瀬だった。

「おはよ彩萌。」

「おはよウジヤエコモス悠璃先輩。」

昨日は一緒に帰ったせいか何となく氣不味い。その為か白瀬への挨拶が上擦ってしまった。

「ひ、うご白瀬。」

「……。」

返事はない。

「何緊張してんのよ。彩萌こんな阿呆相手にしないで先にいくわよ。」

「

「あ、はい先輩。」

「ま、待てよ！？」

悠璃と白瀬は俺を置いて行こうとした先に歩き出した。俺も慌てて歩き出をつとした時俺の横を通りた白瀬が何かを口にした。

「……おはよう……、ヤエコモス……。」

やはり小さな声ではあつたがはつきりと聞こえた。そして俺の見間違いでなければ白瀬は微笑んでいた。

「つて俺を置いてくなよ。」

急いで一人の元へ足を向けた。すると白瀬の髪が一瞬のそよ風に煽られ舞つた。白椿のように咲いた白瀬の髪は美しかった。俺はそれ

に見入ってしまった。

「へぐつ！？」

俺はまた罪のない電柱をしばらくの間ただただ睨んでいた。

## 第6話「電柱と後輩」（後書き）

大変遅くなりました。言い訳はしません。次は少しでも早く皆様のご覧になりますよう頑張ります。

俺は一言で言えれば憂鬱であった。まさかあれがあのうちは微塵も考  
えていなかつた。季節はもうすぐ桜の季節にならひとする頃である。

「恭、帰るよ。」

「……。」

俺は頭を垂れてうなだれる。

「ふーん、私のこと無視するのね？」

「……。」

やはつ行くべきなのが、それとも意を決して逃げ出すべきなのが。  
どちらを選択しても面倒には変わりはない。

「む、無視するなあー。」

「……。」

「恭のくせに……恭のくせに……。」

「ん、悠璃。何ぶつぶつ言つてゐんだ？」

どうこう詰か悠璃は俺の隣で何かを口にしていた。どこか朧氣である。俺の声に

気付いた悠璃は直ぐに俺を睨んだ。

「ア、アンタが悪いんでしょ…いいから帰るわよ。」

「ああ、悪いこれから委員会があるんだ。今日は先に帰つてくれ。」

「もうならもうと先に言えーこの阿呆…」

「ぐへつ…?」

顔面を思い切りカバンで叩かれたせいで、俺の身体は大きく揺らいだ。それと普通に痛かった。それから俺が悠璃の姿を確認しようとした時にはもうその姿はなかった。とは言え俺は委員会に出席することにしたのでのんびりもしてられない。

「んじゃ行くか。」

俺は第三会議室へと向かつた。

「来てしまった…。」

俺は今第三会議室の前にやつて來た。つい先程までは意を決して向かっていたのだが、いざこじして來てみると迷つてしまつ。しばらく俺が悩んでいると後ろから今一番聞きたくない声が聞こえて來た。

「あら、私より早く來るなんて良い心掛けですね。」

「委員長。」

我が委員会を取り仕切る委員長の御水離子。みすいひなこ俺とはクラスは違うが同学年だ。さて、ここからが本題である。俺は詰まり何の委員会に属しているかだ。

「全員揃いましたね。」

気付けば俺は既に第三会議室の中へと入り、椅子に座つていた。

「全員つて言つても俺と離しかいねえだらう。」

「私語は慎むよつこ。」

言葉とは裏腹に目力が強い。俺は黙つてしまつた。

「ほんつ、では」れより『第三会議室委員会』を始めます。』

「はあー。」

俺は一つ深い溜め息をついた。最近ようやくこの委員会の名前についた

いて突っ込むのはやめた。

「あのや、離。」

「何ですか副委員長?」

ちなみに俺は副委員長だったりもある。

「今日は何をするんだ?」

「さあ?」

「…んじゃ今日はかえつましょ。」

「そうですね、帰りましょ。」

俺はもう溜め息をつくこともできないぐらい疲れていた。俺の貴重な放課後を返して欲しい。今だにちゃんと何かをした試しのない委員会が何故存続しているのかは、俺には全くと言っていい程分からなかつた。

「あのや離、ちよつと質問していくいか?」

「何ですか?今日は質問が多いですね。」

俺と雛は委員会を「付けて帰っている途中だった。

「何で俺らの委員会つて一人だけなんだ？」

「わあ～どうしてじゅうね。」

「いやいや、そこ知つてなことまずいだ。とにかく俺らの委員会は一体何をする委員会なんだ？」

雛は可愛いげに首を傾げて少し考えている。その仕草に轟されそうになつたが、さらに俺は問い合わせた。  
「しまじかすると雛は答えた。

「そんなことも知らなかつたんですか。全くダメな副委員長ですね。えつですね.....ひ、秘密です。」

「ちよつと見て、その間はなんだ。」

あからさまに目線を泳がせる雛はかなり怪しく、いきなり歩く速さも上がつてゐる。逃がすまいと俺は雛の手を掴んだ。

「あ。。。」

「いひ逃げるな。」

「掴まつちやいました。」

雛は舌を軽く出して、悪びれた様子で觀念したようだ。夕田が丁度逆光になつて雛の顔はよく見えなかつたがそれだけは分かつた。

「雛も知らないとはな。委員会必要ないん…。」

「要りますよ。必要です。」

俺が言い終わるよりも先に雛が少し強い口調で話した。先にも言つたが夕日の逆光で雛の表情は読み取れないが、きっと雛は真剣な筈だ。

「そつか。分かつた、俺は雛が必要だと言つなら俺は何も言わない。雛がそつに言つならそつなんだろ。」

俺はこれ以上は何も言わずにまた歩き出した。

雛も何も言わずに歩き出した。

実際、雛が何故そつ言つたかは分からぬ。

ただ必要だと雛は言つた。そつであるならそつなのだ、と俺は思つた。それだけのことで簡単なことだ。所詮自分以外は他人である。その他人の真意を読み取るのは容易くはない。俺には難しい。そんな俺に出来ることと言つたら、そいつの言葉を信じてやることだけだ。それぐらいしか俺には出来ないのだから。

「悠ちやんとは上手くいってるんですか?」

滑らかに雛は語り出す。俺はいつもこれに吸い込まれそつになる。

「良好良好。幼馴染みな関係を満喫してるよ。」

「そうですか。悠ちやんは美人さんですから恭は嬉しいんじやない

ですか？」

俺は軽く田畠がした。顔が赤くなっているだろう。

「顔が真っ赤ですね。厭らしいです。」

「…ひげえよ、ばーか。」

「ふいっ。」

ちょっとだけ不機嫌になつた雛はつかつかと歩くペースを上げた。それからぐるりと回れ右をして、俺の方を向いた。

「また明日です。」

「ん、うー。」

俺も軽く手を挙げた。しばらく雛の後ろ姿を見送った。刹那の風が舞い上がる。

「ピンクか。」

そして必死にスカートを後ろ手で抑える陰影が一つ。

「…ひげえよ。」

腹が脹れたところで俺も帰路へと着いた。

「雛に名前で初めて呼ばれたな。…さてと俺も帰るか。」

俺が真っ赤になつた理由、あの艶の滑らかな声で名前で呼ばれたこと。意外と反則だなと思った。

ふと時刻を見るために携帯を覗いた。

着信14件 悠璃

「……今日は野宿の方がいいかもな。」

滑らかな声で（後書き）

大変遅れました（約半年間放置） m — m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5966d/>

---

そんな二人は運命共同体

2010年10月30日10時13分発行